

江戸前期における道統論と儒家神道

森新之介

南宋の朱熹は、道を継承したのは上古聖神の伏羲、神農、黄帝、帝堯、帝舜、夏の禹王、殷の湯王、周の文王、武王、周公、孔子、曾参、子思、孟子、そして千余年後の二程子などであり、周末から北宋までの千余年間、道は隠没して晦盲否塞になった、との道統論を唱えた。これを異国史にそのまま適用すると、道学の伝来以前は未だ嘗て道がなく、すべて晦盲否塞の時代だったということになってしまう。従来注意されずにきたが、朱熹の道統論は異国人の歴史意識への脅威となり得る危険なものであった。

本発表では、この道統論に江戸前期の林羅山と山崎闇斎が如何に対応したかを、その神道論に着目して考察する。二人は思想が少なからず異なっていたものの、ともに道学者であり神道と儒学の関係について論じている。このような儒家神道の登場は、江戸前期の重要な思想現象としてよく知られており、研究蓄積も厚い。しかし、先行研究が十分に説明できていない不審もある。

従来、羅山は神儒一致を唱えたとされてきたが、その思想が表れているという史料を分析すると必ずしもそのように解釈できない。公私両論の使い分けを自認していた羅山に、神儒一致の思想が実在したかは懐疑されるべきである。また闇斎の垂加神道創唱について、土田健次郎は、理という語に慣れ親しんでいない日本人にとって道学は理解し難く、神道と関連付けて修養の実感を得る必要があったとする。しかし、道学における理は支那人が日常会話で用いるそれと同じでないため、日本人だから特別に理解し難いということにならないであろう。

これらの不審は、道統論に着目することで解消できると考えられる。本発表では、羅山と闇斎の神道論がともに朝鮮道学を背景に、道統論という歴史意識と関連していたことを論証したい。